







第II-1-1 図 発掘調査区域及び周辺の地形

### 第三章 遺跡の環境

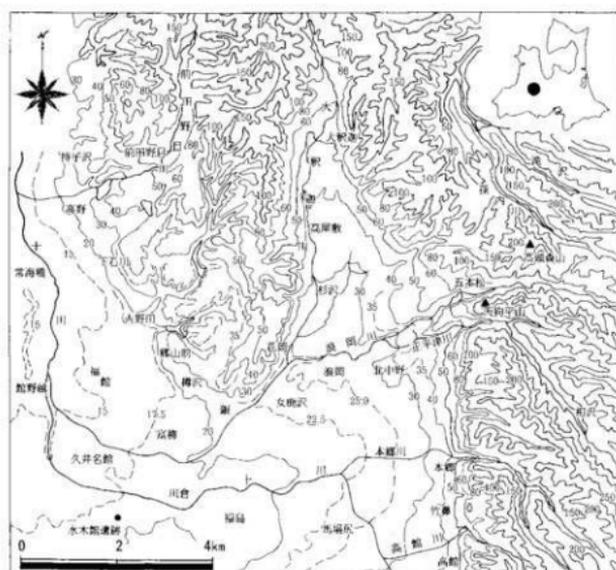
#### 第1節 遺跡周辺の地形及び地質

青森県立板柳高等学校教諭 山口 義伸

南郡浪岡町は津軽平野南東縁に位置し、大釈迦川・浪岡川などの流域に集落が点在する。

浪岡町を流れる主な河川として大釈迦川と浪岡川がある。大釈迦川は梵珠山(468m)を源とし梵珠山地及び前田野目台地の東縁をほぼ南流する。梵珠山地の分水嶺西方を南流する前田野目川は梵珠山の北側に位置する馬ノ神山(549m)を源とし、前田野目付近で平野部に達し平野内を北流する十川と合流する。一方、浪岡川は南方の火山性丘陵地を北西流して平野部に達し前田野目台地南端の女鹿沢付近にて大釈迦川と合流する。合流したのちに台地を迂回して板柳付近で十川と合流する。正平津川も火山性丘陵地に源を持ち、北西流して浪岡町五本松付近で浪岡川に最接近し浪岡城跡で合流する。浪岡川及び正平津川の丘陵地から平野部への出口付近には開析された扇状地性の地形が展開し、また両河川を流下した火砕流堆積物からなる台地も舌状に分布する。なお、浪岡城跡はその火砕流台地上に位置し、南端の崖下には浪岡川と正平津川の合流点を望むことができる。

津軽山地南部の地形をみると、大釈迦川西方及び北方には馬ノ神山及び梵珠山を中心とする南北に



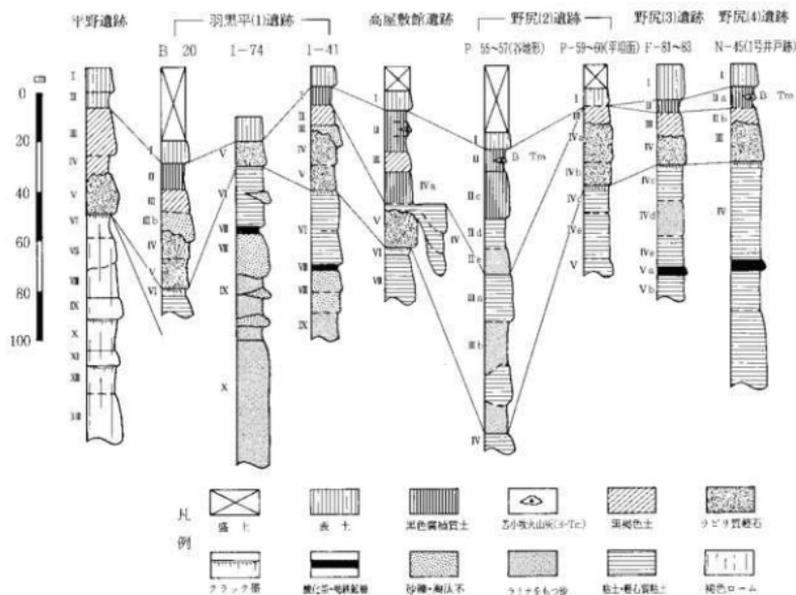
第III-1-1図 浪岡周辺の等高線図











第III-1-4図 各遺跡内における土層の模式柱状図

引用参考文献

- 東北地方第四紀研究グループ 1969 東北地方における第四紀海水準変化 地学団体研究会  
 専報 No15
- 中川久夫 1972 青森県の地質 第二部 (青森県の第四系) 青森県
- 岩井武彦・澤田庄一郎・大久保貢 1982 土地分類基本調査「青森西部」 青森県
- 村岡洋文・長谷敏和 1990 「黒石地域の地質」地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅)  
 地質調査所
- 活断層研究会編 1991 新編日本の活断層 分布図と資料 東京大学出版会
- 山口義伸 1993 年報ひろさき No2 弘前市史

## 第2節 周辺の遺跡（第Ⅲ-2-1図、第1、2表）

1996年3月現在、浪岡町内の遺跡は63箇所が確認されている。時期を平安時代に限定すると、遺跡数は28箇所、全体の半数以上を占める。これまでに、浪岡町内では比較的数量多くの発掘調査が行われてきた。とりわけ、浪岡町教育委員会や青森県教育委員会が実施した東北縦貫自動車道、浪岡バイパス、県道青森-浪岡線建設の3大事業に係る大規模な発掘調査の結果、平安時代の生業や生活内容を解明する上で、数々の貴重な成果を残してきた。

本遺跡は、前田野目台地の標高35～42前後のゆるやかな東斜面に立地している。南東には水田が開け、遠くに八甲田の峰々をのぞみ、北には間近に梵珠山が迫る環境にある。

本遺跡が立地する、梵珠山系の南に連なる前田野目台地には、西側の五所川原市も含めて70箇所余りの平安時代の遺跡が集中して立地している。前田野目台地の東縁即ち大釈迦川の西岸には、北から山本・野尻(1)・本遺跡・野尻(2)・野尻(3)・高屋敷館・山元(1)・山元(2)・山元(3)等の遺跡が立地する。また、台地の西縁や前田野目川沿岸には、五所川原須恵器古窯跡群をはじめとして各遺跡がこれまたひしめきあって立地している。以上のように、前田野目台地周辺は、まさに遺跡の宝庫であり、当時の人々が生活を営む上で適した環境にあったものと思われる。

今回の調査の結果、外周溝、土坑、掘立柱建物跡を伴う堅穴住居跡（本報告書では、これらをセットしてとらえ建物跡と称する。）がまとまった形で検出された。この特殊な形態をとる建物跡群は、浪岡町山本・松元・野尻(2)遺跡、青森市西部の近野・朝日山遺跡等でも検出されている。

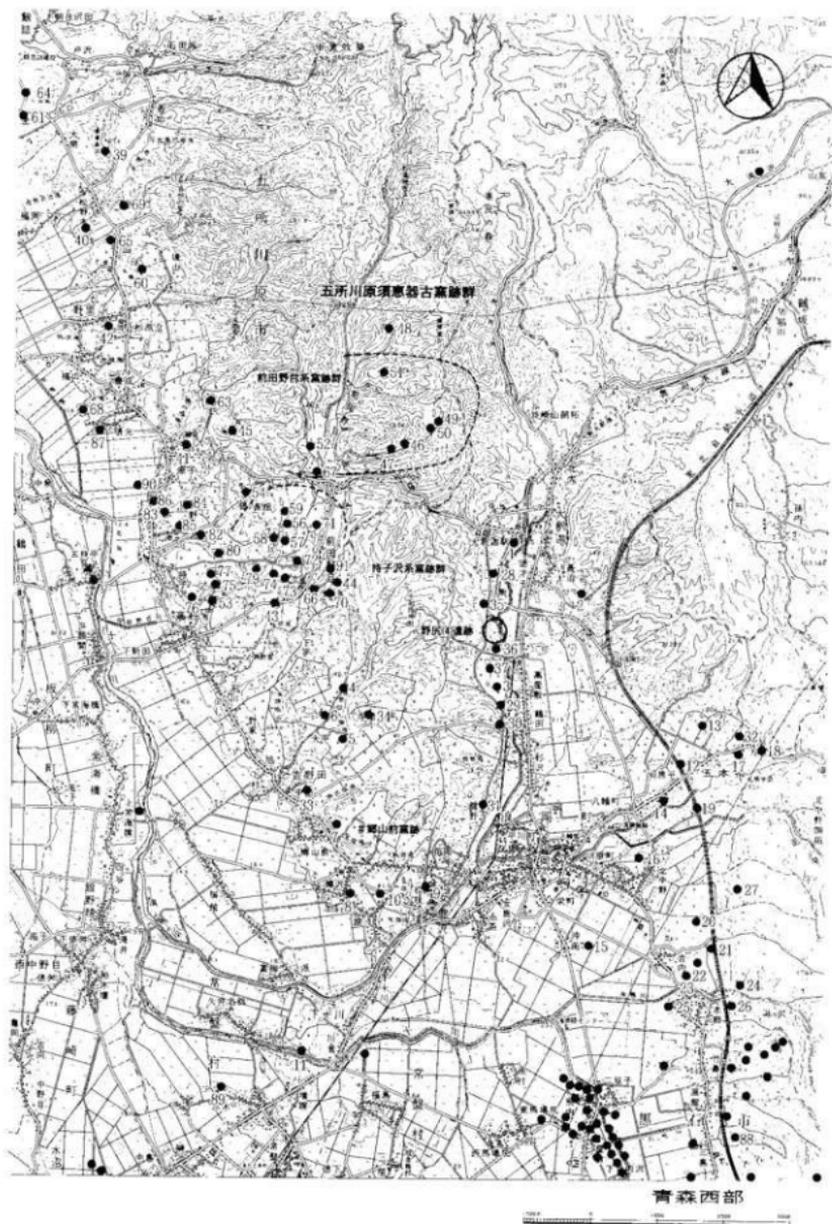
更に、調査区域の南端で検出された環濠（集落）は、幅約4m、総長70m、深さ1.2～1.5mの規模をもつ。時期は異なるが、1km程南に位置する高屋敷館遺跡との関連等が注目される。

以下に、本遺跡と関連の深いと思われる、浪岡町及び周辺の平安時代の各遺跡について、第Ⅲ-2-1図及び第1・2表にごく簡単にまとめておく。

第1表 周辺の遺跡（平安時代）地名表(1)

浪 岡 町				No.	泉遺跡番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考
				11	16	大沼	川倉字大沼袋	☆、◎
				12	17	羽黒平(1)	五本松字羽黒平	☆、◎、◎
1	290-01	早稲田	笹子字早稲田	13	18	羽黒平(2)	羽黒平	
2	02	大堤沢	長沼字南藤巻	14	21	加茂神社	五本松字松元	
3	03	高屋敷館	高屋敷字野尻	15	22	沖林	北中野	
4	04	ド下平	旭	16	23	浪岡崎(1)	北中野字天主	
5	05	旭(1)	旭字木戸口	17	25	松山寺	羽黒平字野輪	
6	06	旭(2)	旭	18	26	松山	〃	☆、◎、◎
7	09	熊沢瀧池	熊沢字村元	19	27	原常平	北中野	☆、◎
8	12	神明宮	巖字杉田	20	36	桃里	北中野字桃里	
9	14	長瀧池	松枝字野尻	21	39	杉の沢	七折字松元(1)字杉	☆、◎
10	15	大林	巖字杉田	22	40	吉内	吉内字山下	

浪 岡 町				No	県道跡番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考	
No	県道跡番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考	67	51	大走(1)	前田野目字大走	
23	40	中屋敷	吉内字山下		68	53	田子ノ浦	豊成字田子ノ浦	
24	42	田ノ沢	本郷字鎌原		69	56	中子	松野本字中子	
25	43	本郷	本郷字御用		70	60	桜ヶ崎(3)	前田野目字桜ヶ崎	
26	44	松元	本郷字松元	☆、◎	71	61	大走(2)	前田野目字大走	
27	47	玉田館	北中野字桃垂		72	62	隠川(2)	持子沢字隠川	
28	49	山本	徳才字字山本	☆、◎	73	63	隠川(3)	〃	
29	54	山元(1)	杉沢字山元		74	64	隠川(4)	〃	
30	55	山元(2)	〃	☆、◎	75	65	隠川(5)	〃	
31	56	山元(3)	〃	☆、◎	76	66	隠川(6)	〃	
32	57	平野	五本松字平野	☆、◎	77	67	隠川(7)	〃	
33	58	吉野田平野	吉野田字平野		78	69	隠川(8)	〃	
34	59	寺塚敷平	吉野田字尚越沢		79	70	隠川(9)	〃	
35	60	野尻(1)	高岸敷字野尻		80	71	隠川(10)	〃	
36	61	野尻(2)	〃	☆、◎、◎	81	72	隠川(11)	〃	
37	62	野尻(3)	〃	☆、◎	82	73	隈無(1)	羽野本沢字隈無	
38	63	野尻(4)	〃	本道跡	83	74	隈無(2)	〃	
五 所 川 原 市					84	75	隈無(3)	〃	
					85	76	隈無(4)	〃	
					86	050-80	隈無(8)	〃	
No	県道跡番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考	87	83	松代	羽野本沢字松代	
39	050-01	長者森山館	松野本字花笠		90	90	実吉	羽野本沢字実吉	
40	050-02	観音林	松野本字花笠	☆、◎	91	59	桜ヶ崎(2)	前田野目字桜ヶ崎	
41		原字瀧池(1)	原字山元	☆、◎	黒 石 市				
42	07	野甲	神山字牧原		No	県道跡番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考
43	08	川崎	前田野目字川崎	▲	88	040-02	高館(1)	高館字丁高屋	☆、◎
44	09	桜ヶ崎	前田野目字桜ヶ崎	☆、◎	常 盤 村				
45	10	山道瀧池	原字山元	▲	No	県道跡番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考
46	11	砂田B・1号室	前田野目字前田野目	☆、◎	89	310-02	本木館	本木字古館	☆(80・94年度)
47	12	砂田B・2号室	前田野目字前田野目		◇注 意◇ 備考欄の記号は、次のことを意味する。 ☆—発掘調査実施、( ) 内は調査年度 ◎—報告書発行 ▲—参考文献有り				
48	13	砂田C	前田野目字砂田	☆、◎					
49	14	砂田D・1号室	前田野目字砂田	☆、◎					
50	15	砂田D・2号室	前田野目字砂田	☆、◎、▲					
51	16	砂田E	前田野目字前田野目	▲					
52	17	鞠ノ沢	前田野目字鞠ノ沢	☆、◎					
53	18	持子沢館	持子沢字隠川						
54	19	狼野長根	〃						
55	20	隠川(1)	〃						
56	21	持子沢A	〃	☆、◎					
57	22	持子沢B	〃						
58	23	持子沢C	〃						
59	24	持子沢D	〃	☆、◎					
60	25	境山	神山字境山						
61	29	金山大瀧池	金山字千代鶴						
62	37	飯詰城	飯詰字福泉						
63	39	原字瀧池(4)	原字山元						
64	41	金山館	金山字千代鶴						
65	42	神山館	神山字鍋野						
66	43	真言館	前田野目字桜ヶ崎	▲					



第III-2-1図 周辺の遺跡

No	編著者名	発行年	題名	書名・巻号
1	奈良岡洋一	1977	浪岡町川崎岡辺出土の土器類	『考古風土記』 第2号
2	青森県教育委員会	1978	高森平遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第39集
3	〃	1978	高森遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第40集
4	〃	1979	羽黒平遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第44集
5	〃	1979	杉の丘遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第45集
6	〃	1979	松元遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第46集
7	浪岡町教育委員会	1980	松山遺跡発掘調査報告書	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第1集
8	〃	1981	羽黒平(1)遺跡発掘調査報告書	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第2集
9	青森県教育委員会	1987	山本遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第105集
10	浪岡町教育委員会	1990	大沼遺跡発掘調査報告書 平安時代の低地遺跡調査	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第4集
11	青森県教育委員会	1994	山元(1)遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第159集
12	〃	1995	野尻(2)遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第172集
13	〃	1995	松山・羽黒平(1)遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第170集
14	〃	1995	山元(2)遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第171集
15	〃	1995	木木館遺跡発掘調査報告書	青森県埋蔵文化財調査報告書 第173集
16	五所川原市教育委員会	1968	津軽・前田野日原跡	
17	平山 久夫	1969	津軽平野の須志器(予報)	『北奥古代文化』 第2号
18	坂詰 秀一	1972	津軽・持子穴窯跡の調査	『考古学ジャーナル』 第75号
19	〃	1972	津軽・持子穴窯跡の第2次調査	『 〃 』 第89号
20	〃	1973	津軽持子穴窯跡調査概報	『北奥古代文化』 第5号
21	五所川原市教育委員会	1974	原子遺跡	
22	〃	1974	津軽・前田野日原跡	
23	村越 俊・新谷 武	1974	青森県前田野日原遺跡遺跡発掘調査概報	『北奥古代文化』 第6号
24	坂詰 秀一	1974	津軽持子穴窯跡第2次調査概報	『 〃 』 第6号
25	新谷 武	1974	青森県前田野日原遺跡跡出土の器々土器について	『 〃 』 第7号
26	坂詰 秀一	1974	津軽前田野日原跡群をめぐる課題	『 〃 』 第7号
27	五所川原市教育委員会	1975	観音林遺跡(第一次)	
28	新谷 雄藏	1976	観音林遺跡の調査研究	『考古風土記』 第1号
29	新谷 武	1981	五所川原市周辺の須志器窯跡出土の長頸壺について	『弘前大考古学研究』 第1号
30	五所川原市教育委員会	1984	観音林遺跡(第二～九次) ～91	
31	桑原 雄郎	1986	津軽で使われた須志器——前田野日原跡	国史発掘が語る日本史 新人物往來社
32	青森県教育委員会	1990	国説 ふるさと青森の歴史 総括編	
33	三浦 圭介	1990	日本東北における古代後半から中世にかけての土器様相	『1器からみた中世社会の成立』
34	三浦 圭介	1991	古代における東北北部の生業 『北からの視点』	日本考古学協会宣紙・福会大社 シンポジウム
35	三浦圭介・岡田博康	1992	津軽五所川原古窯跡について 『東日本における古代・中世窯業の諸問題』	大戸建設のための『会津シンポジウム』
36	三浦 圭介	1993	青森県における古代の土器様相 『北日本における律令期の土器様相』	第18回古代城壕考古学連絡検討会
37	三浦 圭介	1994	『第3巻 古代』 『弘前市史』	
38	北林 八海晴	1983	「古代(奈良・平安)」 『青森県の考古学』	青森大学出版局
39	黒石市教育委員会	1995	豊岡(1)遺跡	黒石市埋蔵文化財調査報告書 第13集
40	山田昇・大田原慶子	1996	平安時代の人形模な摩崖遺跡 ——青森県高屋敷館遺跡	季刊考古学第54号
41	三浦 圭介	1995	青森県における古代末期の防衛性集落	考古学ジャーナル 4月号
42	丁藤 浩泰	1991	古代末・中世初期の北奥羽 ——考古学資料からの考察——	歴史評論 11月号
43	三浦 圭介	1995	北奥・北海道地域における古代防衛性集落の発生と 展開 『青森県十二巻遺跡・福島城の研究』	国立歴史民俗博物館研究報告 第64集

## 第IV章 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構と遺物は、平安時代のそれと比較して、数量的に極めて少ない。居住区を構成する堅穴住居跡などの遺構は一切検出されず、狩猟活動に関連づけて考えられている溝状ピットが4基と、用途不明の土坑が1基検出されたのみである。溝状ピットから縄文土器などの遺物は全く出土していない。

遺構外の土器は、全て破片で、出土状態はプライマリーなものではない。1個体のみ口縁部の約2分の1が復元されたものの、他は全て接合率の低い破片資料である。器表面の摩滅の状態より察して、本遺跡の周辺から移動してきたものも多いのではないかと推察される。総量は33cm×25cm×5cmのデスタトレイ1つに納まる程度である。

石器は、定形石器が6点、不定形石器が2点の合計8点が出土した。ほかに石製品1点と調整や使用痕の認められない剥片（図示していない）が数点出土した。なお、磨石や石皿等の調理具類は出土していない。

以下、縄文時代の遺構・遺物について記載する。

\*縄文土器・石器は、平安時代の遺構から出土したのも遺構外出土物として本章にはあてて記載する。

\*遺物の出土しなかった遺構の中にも縄文時代の遺構が含まれている可能性はあるが、ここでは確知に縄文時代として認定できた遺構のみを報告する。

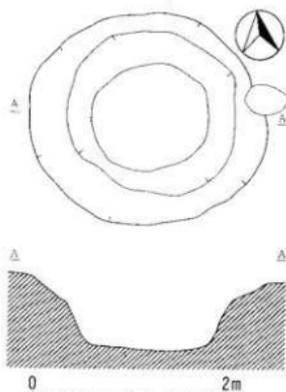
### 第1節 遺 構

5基検出した。土坑1基と溝状ピット4基である。非常に散発的な位置関係を示し、限定された範囲内にまとまるような傾向は伺えない（付図参照）。以下、土坑、溝状ピットの順に検出した5基について述べる。

#### 1 土 坑

##### 第200号土坑

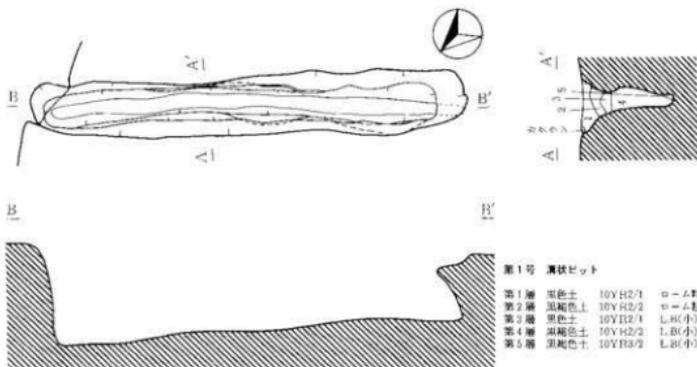
位 置	E-80, E-79	図 版	第IV-1-1図	写真	4-5	
番 号	西側上端で平安時代の柱穴と重複する。本遺構が古い。					
平 面 形	横円形					
規 模	上 端	238cm × 211cm	下 端	118cm × 107cm	深 さ	73cm
形 状	緩やかに立ち上がる上位と下位間に段差あり 底 面 ほぼ平坦					
堆 積 土	湧水があまりに著しいため、セクション図は作成しなかった。断面観察では、上層に泥人物のほとんどない黒色土。下層にはローム混合土が層状に堆積していた。全て自然堆積と考えられる。					
出 土 遺 物	発掘土中から縄文土器片が12点出土した(第IV-2-2図15-19, 第IV-2-3図1-3)。					
備 考	縄文土器のみが出土した遺構は本遺構だけである。 平安時代の土坑と比較し、非常に黒色の強い土壌である。					



第IV-1-1図 第200号土坑

第1号 溝状ピット

位置	I-105	図版	第IV-1-2図	写真	4-6
景観	第15号溝と重複する。本遺構が古い。				
平面形	溝状				
規模	上端 346cm×52cm	下端	330cm×34cm	深さ	73cm
壁	赤土、フラスコ状に立ち上がる			底面	ほぼ平坦
埋積	5層に分層 半体：赤褐色土 混人物：ローム粒子・ロームブロック 全て自然埋積と考えられる。				
出土遺物	なし。				
備考					

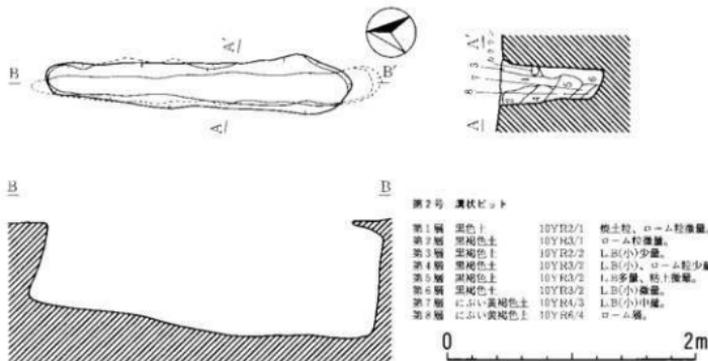


第1号 溝状ピット

- 第1層 赤色土 10YR2/1 ローム粒微量。  
 第2層 赤褐色土 10YR2/2 ローム粒微量。  
 第3層 赤色土 10YR2/1 L.B(小)粒、ローム粒微量。  
 第4層 赤褐色土 10YR2/2 L.B(小)、ローム粒少量。  
 第5層 赤褐色土 10YR2/2 L.B(小)、ローム粒少量。

第2号 溝状ピット

位置	K-05	図版	第IV-1-2図	写真	4-7
景観	第37号溝と重複する。本遺構が古い。				
平面形	溝状				
規模	上端 254cm×48cm	下端	272cm×34cm	深さ	83cm
壁	赤土、フラスコ状に立ち上がる			底面	ほぼ平坦
埋積	6層に分層 半体：赤褐色土 混人物：ローム粒子・ロームブロック 自然埋積か人為埋積が不明。				
出土遺物	なし。				
備考					



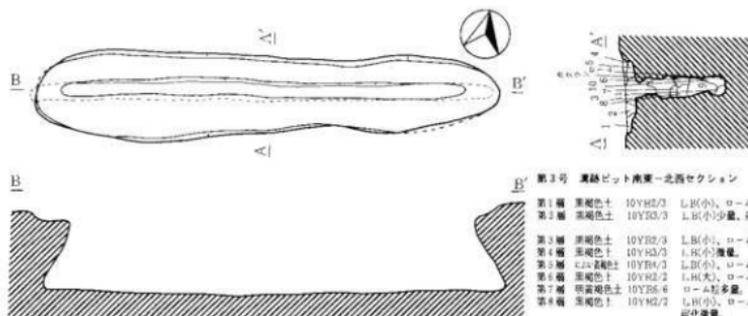
第2号 溝状ピット

- 第1層 赤色土 10YR2/1 微土粒、ローム粒微量。  
 第2層 赤褐色土 10YR2/1 ローム粒微量。  
 第3層 赤褐色土 10YR2/2 L.B(小)少量。  
 第4層 赤褐色土 10YR2/2 L.B(小)、ローム粒少量。  
 第5層 赤褐色土 10YR2/2 L.B多量、粘土微量。  
 第6層 赤褐色土 10YR2/2 L.B(小)微量。  
 第7層 赤い赤褐色土 10YR2/3 L.B(小)少量。  
 第8層 赤い赤褐色土 10YR2/4 ローム塊。

第IV-1-2図 溝状ピット(1)

第3号 溝状ピット

位置	J-7, K-7	図版	第IV-1-3図	写真	4-8
規模	なし				
平面形	溝状				
現像	上端 302cm×72cm	下端	340cm×44cm	深さ	89cm
壁	土軸：プラスチック、底軸：丁字状に立つた管				底面：ほぼ平坦
埋積上	10層に分層、主体：褐色土、炭人物、ローム粒子、ロームブロック、炭化物粒、自然堆積と考えられる。				
出土遺物	なし				
備考					

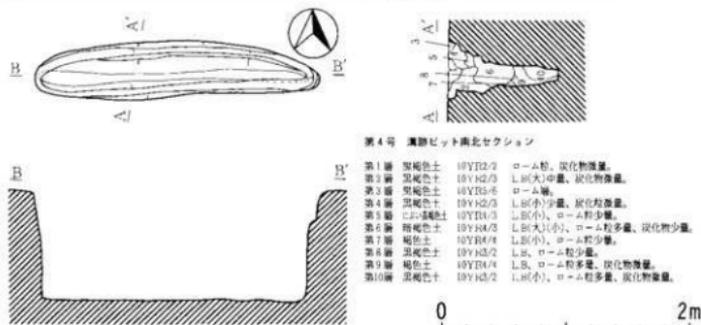


第3号 溝状ピット南東-北西セクション

- |      |      |         |                     |
|------|------|---------|---------------------|
| 第1層  | 栗褐色土 | 10YR2/3 | L.R.小、ローム粒少量、炭化物少量。 |
| 第2層  | 栗褐色土 | 10YR3/3 | L.R.小少量、炭化物少量。      |
| 第3層  | 栗褐色土 | 10YR2/3 | L.R.小、ローム粒少量。       |
| 第4層  | 栗褐色土 | 10YR3/3 | L.R.小少量。            |
| 第5層  | 赤褐色土 | 10YR4/3 | L.R.小、ローム粒中量。       |
| 第6層  | 栗褐色土 | 10YR2/2 | L.R.大、ローム粒少量。       |
| 第7層  | 灰褐色土 | 10YR5-6 | ローム粒多量。             |
| 第8層  | 栗褐色土 | 10YR2/2 | L.R.小、ローム粒少量、炭化物量。  |
| 第9層  | 栗褐色土 | 10YR2/3 | 炭化物少量。              |
| 第10層 | 赤褐色土 | 10YR4/3 | L.R.小少量、炭化物(小)少量。   |
| 第11層 | 褐色土  | 10YR4/6 | ローム。                |
| 第12層 | 褐色土  | 10YR4/4 | L.R.小、ローム粒中量、ローム。   |
| 第13層 | 褐色土  | 10YR4/6 | ローム。                |

第4号 溝状ピット

位置	J-22, K-22	図版	第IV-1-3図	写真	—	
規模	第104号溝と重複する。本遺構の占め。					
平面形	溝状					
現像	上端 228cm×40cm	下端	216cm×24cm	深さ	88cm	
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。				底面	ほぼ平坦
埋積上	10層に分層、主体：栗褐色土、炭人物、ローム粒子、ロームブロック、炭化物粒、自然堆積の高層堆積が不明。					
出土遺物	なし					
備考						



第4号 溝状ピット南北セクション

- |      |      |         |                        |
|------|------|---------|------------------------|
| 第1層  | 栗褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒、炭化物少量。            |
| 第2層  | 栗褐色土 | 10YR2/3 | L.R.大中量、炭化物少量。         |
| 第3層  | 栗褐色土 | 10YR3-6 | ローム層。                  |
| 第4層  | 栗褐色土 | 10YR2/3 | L.R.小少量、炭化物少量。         |
| 第5層  | 赤褐色土 | 10YR4/3 | L.R.小、ローム粒少量。          |
| 第6層  | 暗褐色土 | 10YR4/2 | L.R.大(小)、ローム粒多量、炭化物少量。 |
| 第7層  | 褐色土  | 10YR4/8 | L.R.小、ローム粒少量。          |
| 第8層  | 栗褐色土 | 10YR2/2 | L.R.、ローム粒少量。           |
| 第9層  | 褐色土  | 10YR4/4 | L.R.、ローム粒多量、炭化物少量。     |
| 第10層 | 栗褐色土 | 10YR2/2 | L.R.小、ローム粒多量、炭化物少量。    |

第IV-1-3図 溝状ピット(2)

## 第2節 遺物

### (1) 土器 (第IV-2-1~3図)

表土層と第II層及び下記の遺構内から出土した。全て破片である。

縄文土器出土遺構一覧表

遺構	層位	破片数	備考	遺構	層位	破片数	備考
第30号竪穴住居跡	覆土	2	平安時代	第120号溝	覆土	2	平安時代
第74号土坑	覆土	18	平安時代	第120号溝	底面	1	平安時代
第79号土坑	覆土	2	平安時代	第129号溝	覆土	8	平安時代
第200号土坑	覆土	11	縄文時代	第137号溝	覆土	1	平安時代
第10号溝	I層	1	平安時代	第140号溝	II層	1	N-17
第41号溝	覆土	1	平安時代				

破片は57点出土した。遺構外の遺物は23ラインから南域に分布する傾向が認められる。

表面の磨滅が著しいものも多く、また破片のため型式名の特定は困難である。よって出土土器の分類は、下記のように概区分した。

第I群土器：縄文前期後葉の土器

第II群土器：縄文後期前葉の土器

第1類 磨消縄文

第2類 沈線文主体の土器で、平行沈線、S字状沈線

第III群土器：縄文後期中葉の土器

第1類 磨消縄文

第2類 縄文のみ

第IV群土器：縄文後期の土器と思われるが、明確に時期を特定できないもの

第V群土器：縄文晩期前葉の土器

第I群土器：縄文前期後葉の土器 (第IV-2-1図1~2)

1, 2ともに繊維を混入し、大変磨滅が著しい。胴部であるため、型式名の特定は困難であるが、概ね2点とも円筒下層式土器の範疇に収まるものと思われる。2は、単軸絡条体L縄文が施される

第II群土器：縄文後期前葉の土器 (第IV-2-1図3~16)

3~7 (第1類) は沖附(2)式に平行する可能性が高いと思われ、8~16 (第2類) は平行沈線文、S字状沈線文が施文されており、十腰内I式に比定されると思われる。

第III群土器：縄文後期中葉の土器 (第IV-2-1図17, 18~第IV-2-2図1~5)

第IV-2-1図17, 18~第IV-2-2図1 (第1類) は、底径が小さく、胴部中央で大きく広がり、口縁部がさらに大きく広がる器形と思われる。第IV-2-2図5 (第2類) は、口縁部下6cmまでし

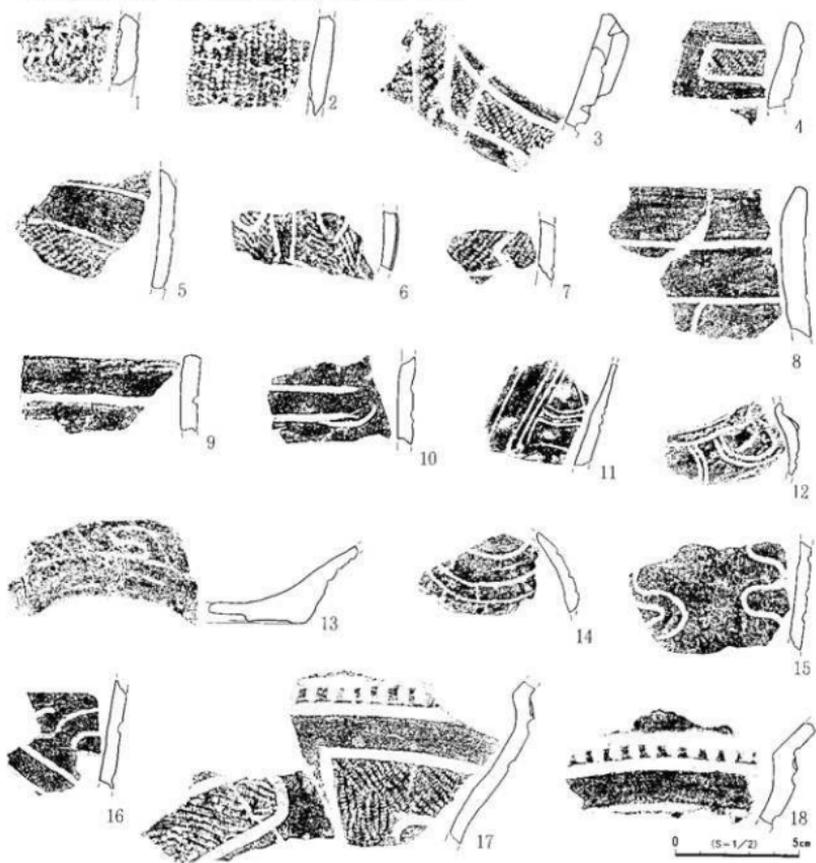
か器形を復元できない。口唇部は肥厚し、入念なミガキが施される。第1類、第2類ともにはほぼ十腰内Ⅲ式土器に平行すると思われる。

第Ⅳ群土器：縄文後期の土器と思われるが、時期を特定できないもの（第Ⅳ-2-2図6、7）

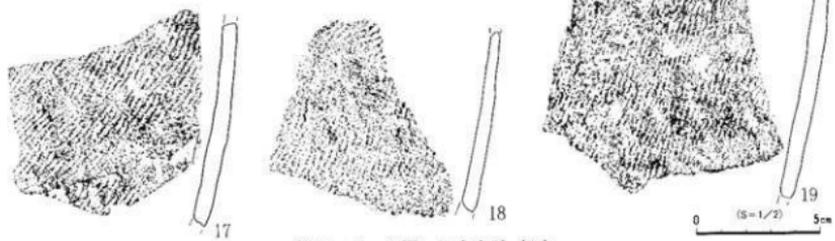
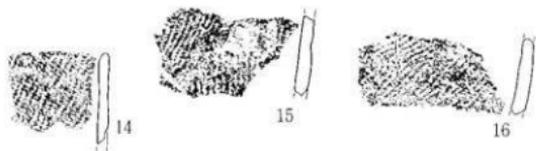
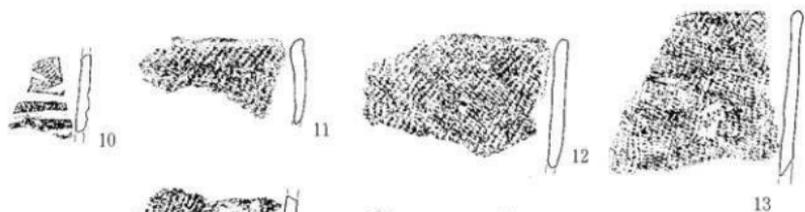
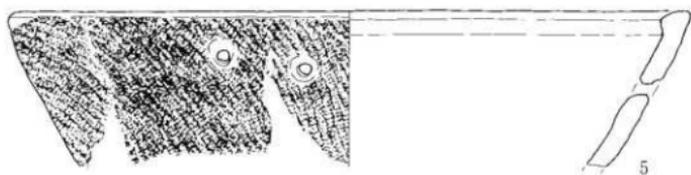
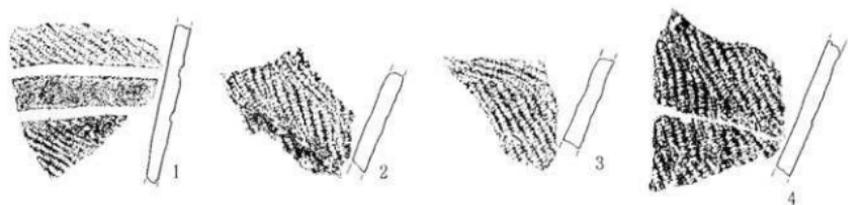
6は、小礫を多量に含み、内面には荒くケズリを施す深鉢の胴部破片で、他の縄文土器とは全く状態の異なるものである。7は、淡橙色に焼成されるもので、縄文施文後に折り返し部を貼付している。

第Ⅴ群土器：縄文晩期の土器（第Ⅳ-2-2図8～19、第Ⅳ-2-3図1～3）

8と9は同一個体と思われる、9はB状突起中央部より垂下する沈線が三叉文につながる文様構成と思われる。8は、磨消縄文が観察される口縁部直下。10は、白色に焼成されるもので、縄文の節が非常に細かい。8～10は大洞B式の鉢（台付鉢?）と思われる。11～3は、大洞B～BC式くらいに比定される粗製の深鉢と思われる。焼成は非常に軟質である。



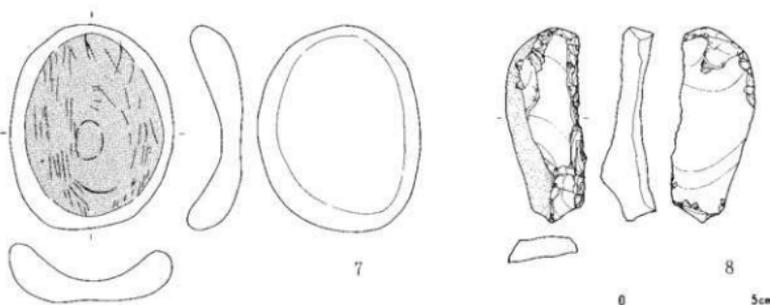
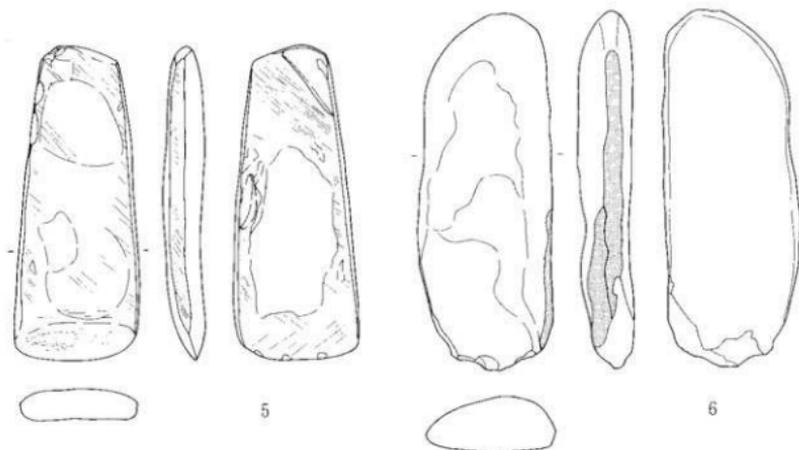
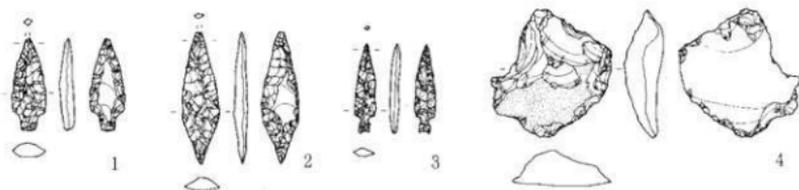
第Ⅳ-2-1図 縄文土器 (1)



0 (5=1/2) 5cm

第IV-2-2圖 縄文土器(2)





No.	出土地点	層位	分銅長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石 材	種 類	付属 整理品
1 G-49		I a	33.5	12.5	6.0	2.0	珸質頁岩		有 4-15
2 F-80		I b	46.0	13.5	5.5	1.9	珸質頁岩		有 4-14
3 M-15		I c	33.0	7.5	3.0	0.4	珸質頁岩		有 4-13
4 F-23		I B b	47.0	14.0	14.0	19.0	珸質頁岩	磨表面残存・刀部磨滅・パルヴェスカー首	— 4-12
5 第34号溝(N.77N)	溝土	Ⅱ	114.0	45.0	15.0	110.0	細粒神尾製灰岩	磨表面残存・磨切技法・片刃	無
6 G-25		I B a	130.0	30.0	30.0	125.9	細粒凝灰岩		無 4-18
7 F-20		I B b	75.0	20.0	20.0	53.0	細粒凝灰岩		4-11
8 B-6		I B a	71.0	30.0	20.5	27.3	珸質頁岩	磨表面残存・磨表面残存	無 4-9

第IV-2-4図 縄文時代の石器